

2017年度多摩大学アジアダイナミズムプログラム 上海研修について

An Activity Report of the Educational Visit to Shanghai
in Tama University Asia Dynamism Program 2017

◎巴 特 尔 * ○水盛 涼一 * (◎は代表者)
Baatar Ryohichi MIZUMORI (○は執筆者)

1. 研修の目的

1989年の開学にあたり、本学は「国際性」「学際性」「実際性」の三つの基本理念を打ち出した。この理念は消えること無く維持され、現在にまで生き続けている。今次われわれは学生とともに上海を訪問した。上海は北京や香港を越えて人口・域内総生産ともに中国最大であり、世界経済の一つの要にあたる。そこでは協定校である上海東海職業技術学院(以降東海学院と表記)と交流を行ったほか、上海市内各地で見聞を広めた。今次の活動により、学生は必ずやアジアダイナミズムと向きあい国際性を伸ばすことができたことであろう。

2. 研修の背景

2016年11月28日、多摩大学と東海学院は協定を締結した。東海学院は1993年に開学した私立大学で、現在のキャンパスは上海市閔行区にある紫竹ハイテクパークの一角(虹梅南路6001号)に位置する。在校生は5200名あまりで、学部教育機構として経営管理学院、商学院、藝術学院、機械電子(メカトロニクス)学院、航空学院、護理(看護)学院、伝媒(メディア)学院、および基礎教育学部、社会科学部(社会主義思想教育部門)、継続教育学院の十部門を有する。すでにアメリカのニューヨーク州立大学オスウィーゴ校、イギリスのハダースフィールド大学、オーストラリアのチャールズスタート大学、ドイツのアンベルクヴァイデン応用科学大学といった世界の大学と協定を結んでおり、国際交流への志向も強い。

協定を受け、東海学院からは2017年7月3日から7日にかけて教員2名および学生7名(男子5名、女子2名)あわせ9名が多摩大学を訪問した。うち教員は商学院講師の李慶華氏、おなじく冬梅氏となる。一行はサントリー府中工場などを見学したほか、国際経営入門をはじめとする講義を受講し、日中相互発表や文化体験を行った。また7月6日には校長の項家祥氏、党政弁公室主任の李希萌氏、商学院院長の呉静芳氏、校長助理・招生就業処処長・学生工作部部長の郁萍氏、培训中心副主任・伝媒学院副教授の王翔宇氏らが多摩大学を視察した。

そこで今次は本学経営情報学部教授のバートル・准教授の水盛涼一および学生15名(男子

* 多摩大学経営情報学部 School of Management and Information Sciences, Tama University

13名、女子2名)が東海学院を訪問し相互交流を行ったのである。なお東海学院にとってこの規模の訪問は開学以来初めてであったといい¹、大きな印象を残したようである。

3. 研修の具体的内容

今次研修内容は大きく二種に分かれる。第一に、東海学院の各種行事では教員は東海学院の教授法を学習し、学生は多摩大学での通常講義とは異なる新鮮な講義を受講し、多角的な視点の獲得につとめた。また学生の相互発表や学生寮訪問、学生のみでの会食を行うことにより、学生の直接的交流による相互理解の促進を行った。第二に、課外の時間には上海市中心部に進出し中国の購買動向や電子決済の実態につき視察を行った。また全体を通して学生の学習意欲の向上と海外留学への動機付けを並行して行った(実際に1名が2018年2月から半年の留学を申請)。

具体的な日程は下項のとおりである。往復の飛行機および宿舎は学生の出費低減を考え格安のものを選択した。初日と最終日の空港送迎、また9月12日の市内中心部視察の往復は上海久通商旅汽車服務有限公司のバスをチャーターした。東海学院所在地は市内中心部から南西に20キロメートルほど離れている。今次利用した上海浦東国際空港は中心部から南東に30キロメートルほど離れており、それぞれを頂点とする鋭角三角形を描くことができる。

多摩大学上海短期留学プログラム日程表

日時	午前	午後	夜	備考
9月10日 (日)	・6:30 羽田空港国際線ターミナル中国東方航空カウンター前集合 ・MU576便 羽田8:40発上海浦東10:40着	空港到着後、上海市内ホテルチェックイン	自由活動	・送迎車手配 ・昼食:機内食 ・夕食:市内
9月11日 (月)	・9:00 ロビー集合 ・9:30~10:45 大学説明会 ・10:30~11:30 校舎・学内企業見学 ・11:40~歓迎会	・14:30~15:30 講義 ・16:00 ホテルへ移動	自由活動	・昼食:歓迎会(東海学院の幹部と学生代表が歓迎会参加予定) ・夕食は学食
9月12日 (火)	・8:45 ロビー集合 ・10:00~12:30 上海市内視察	・13:00~ 昼食(上海市内) ・14:00~17:00 上海市内視察 ・18:00 夕食(上海市内)	南京路商業街見学(ビジネスモデルなど)	・専用車手配 ・夕食:市内
9月13日 (水)	・9:00 ロビー集合 ・9:30~10:15 中国語講座 ・11:00~11:45 中国語講座	12:30~ 昼食(学食) 13:30~16:00 中国文化関連講義	日中大学生カラOK大会	・夕食は市内 ※バトル帰国(MU539便 上海浦東 13:05発 羽田 16:45着)
9月14日 (木)	・9:00 ロビー集合 ・9:30~10:15 中国語講座 ・11:00~11:45 中国語講座	・11:45~ 送別会 ・14:00~15:00 発表会	同上	・昼食:送別会 ・夕食:市内
9月15日 (金)	・9:00:ホテルロビー集合・チェックアウト ・MU539便 上海浦東13:05発 羽田16:45着	羽田空港到着後、現地解散		・送迎車手配 ・昼食:機内食

1日目：9月10日(日) 東京羽田国際空港 → 上海浦東国際空港 飛行機の出発は午前8時40分であり、カウンター前集合を6時30分とした。ただし設定時刻が早きに過ぎ、半数の学生は何らかの形で近隣に宿泊したという。飛行機は8時50分には飛び立ち、順調に飛行して10時30分に上海に着陸した。なお空港には横浜在の翰林日本語学院の張恵講師にご足労いただき、バスで宿舎へと向かった。宿舎は「錦江之星閔行吳涇店」(上海市閔行区劍川路165号)である。空港からは一時間ほどをかけ、午後1時30分ごろに宿舎へ到着した。

¹ 東海学院ホームページ、2017年9月12日付「日本多摩大学師生17人来我校交流訪問」(<http://pic.esu.edu.cn/dhxw/2017/15939.html>)、2017年9月15日付「日本多摩大学師生交流訪問活動圓滿結束」(<http://pic.esu.edu.cn/dhxw/2017/15961.html>)、ともに9月20日閲覧。

ここで教員三名は所要時間や経路把握のため事前にバスの利用を試みた。乗車するバス停は「剣川路宝秀路」で、729 番バス（「上海南站（北広場）」始発、「東海学院」終点）あるいは 958 番バス（「広元西路華山路」始発、「閔行」終点）を利用する。上海東海学院の付近には華東師範大学や上海交通大学の新キャンパスが次々と開かれており、2017 年 7 月 8 日には複合型ショッピングモール呉涇宝龍広場も開業し、発展いちじるしい地域であった。その後、午後 5 時 30 分には一同で宿舎対面の部落情火鍋呉涇店を訪問、中国の鴛鴦火鍋を食した。

2 日目：9 月 11 日（月） 大学訪問、歓迎レセプション、講義聴講 宿舎五階には食堂があり、午前 8 時ちょうどに待ち合わせ、一同で朝食を採った。また 8 時 45 分に一階ロビーへ集合した。ただし一部学生は緊張のあまり寝過ぎたといい、教員による居室訪問を行った。9 時 20 分に東海学院へ到着すると、伝媒学院副教授の王翔宇氏と前日からの張恵氏が出迎えた。電光掲示板には「熱烈歓迎 日本多摩大学師生訪問我校」の記載があった。その後、歓迎レセプションに参加するため図文信息楼校舎の南側八階 807 番会議室に向かう。そこでは校長の項家祥氏、副校長の尹雷方氏、党政弁公室主任の李希萌氏、外事弁公室主任の楊静氏、商学院院長の呉静芳氏、王翔宇氏、商学院弁公室主任の馬理明氏のあわせて 7 名が参集していた。

楊静氏の司会により簡単な紹介を終えたのち、項家祥氏が歓迎のことばを述べた。そこでは往時の日本につき経済や技術の躍進が中国を刺激したこと、現在の中国は人口や生産開発の面で世界に大きな影響力を持つことに言及し、日本と中国の学生交流を推進し友好を深化するよう希望した。そして東海学院の紹介映像を鑑賞し、バートルより答礼のことばを述べた。



ついで 10 時 15 分より王翔宇氏・馬理明氏の先導で学内施設を見学した。まず航空学院の持つサービス訓練用の飛行機模型を参観した。なお模型は西安飛鷹亜太航空模擬設備有限公司によって制作されており、中国全土へ納品を行っているという。また 10 時 30 分より銀行窓口を再現した教室を参観した。ここでは東海学院の充実した教学環境を感じることができた。

続いて近隣の伝媒学院へ移動、10 時 45 分ごろより東海学院所蔵のスーパーコンピューターやミニシアターを見学した。案内をする王翔宇氏は学生とともに主に微電影すなわちショートフィルムの撮影や出演を行っており、近日放映される上海地区のマクドナルド TVCM にも出

演しているという。ここには「上海市高等職業教育 産教研協同基地」という看板が掲げられ、学院の産学連携活動推進が強調されていた。



学内参観後には東海学院から滬華国際大酒店（鶴慶路 300 号）へ徒歩で移動、11 時 30 分より多摩大学一行は李希萌氏、楊静氏、王翔宇氏、馬理明氏、張恵氏とともに会食を行った。そして午後 1 時 30 分には大雨の降るなか東海学院への帰路についた。午後 2 時からは五階 503 番教室で張恵氏より中国語の初歩につき講義を受けた。以降の講義の際には講師が 3 分ほど講義をおこない、ついで 3 分ほど水盛が通訳を行い日本人学生へ伝える形式をとった。午後 4 時には東海学院を離れバスにより宿舎へ向かった。午後 7 時のところ 15 分遅れで一同ちかくの飲食街へ向かい、学生の選択により上海料理「聚鑫閣呉涇店」（永徳路生活時尚街 359 号）を選択した。背面には虹梅新苑なるマンション群があり、この飲食街では重慶、北京、四川、湖南、陝西といった地域の郷土料理を提供している。その後、午後 10 時に宿舎へ帰り着いた。

3 日目：9 月 12 日（火） 市中視察 市中視察の典型的なコースと上海迪士尼（ディズニーランド）コースの二組に分かれる。後者の選択者はすべて大学一年次の男子 2 名女子 2 名であった。前者はバートルと張恵が引率し、大世界、南京路步行街、豫園、南翔饅頭店を回った。後者は水盛が引率した。宿舎からは一同で久通商旅のマイクロバス（空港送迎より一段小さく、乗務員も異なる）に乗り、8 時 30 分集合ながら 50 分に出発した。そして迪士尼組は 9 時 20 分に下車し付近の沈社公路駅より軽軌鉄道八号線へ乗り。ここから東方体育中心駅へ、そこから十一号線で迪士尼駅へ進み、10 時 30 分に到着した。迪士尼のチケットは一日券に「平日」と「高峰日」（土日休日）があり、一般入場者はそれぞれ 370 元と 499 元が必要であった。購買時には身分証 1 枚あたりチケット 5 枚を入手できる。チケットには QR コードが付属し、入場管理、WIFI 接続、ファストパス予約、場内写真サービスと関係している（東京でも同様）。

アトラクションは、たとえばカリブの海賊にあたる「加勒比海盜 沈落宝蔵之戦 Pirates of the Caribbean Battle for the Sunken Treasure」は「天猫 TMALL 呈献」（TMALL はアリババグループの B2C 電子モール）であり、トロンレガシーをモチーフとした「創極速光輪 Lightcycle Power Run」は「雪佛蘭 Chevrolet 呈献」（シボレーはアメリカ・ゼネラルモーターズの販売する自動車ブランド。中国では上海汽車との合弁により展開）であり、続く建物には「創界 Tronrealm Chevrolet Digital Challenge 雪佛蘭数字挑戰」が設置されていた。これらはアトラクションすべてを企業が提供したものである。日本でも「参加企業制度」として松下によるミートザワールド、トミーによるウエスタンリバー鉄道などの例が見られるが、開園まもない上海迪士尼でも大規模に実施されたようである。

2016 年 6 月の開園当初は入場者数過多やマナー問題が指摘されたが、現在はゴミ箱が増えキャスト（職員）への教育も行き届いたようで、大きな問題は感じられなかった。また待機時

間は短く快適に調査を行うことができた。ただし当地としては問題も認識しているようで、水盛が9月13日に視聴した早朝の東方衛視ニュース番組「看東方」の報道「上海：迪士尼今起啓用電子版“快通証”」（上海国際旅游度假区公安処治安隊副隊長の沈臻へのインタビューを含む）によれば、転売行為撲滅のためにチケットの電子化を推進するという。

午後4時20分、迪士尼を離れ、十一号線で羅山路駅へ、そこから十六号線で龍陽路駅へ、さらに二号線で陸家嘴駅へ向かった。午後5時30分には正大広場に到着し、九階の上海料理店「小南国」（陸家嘴西路168号正大広場九階）へ向かった。小南国は揚州飯店（黄浦区南京路福建中路345号）や圓苑（徐匯区襄陽北路108号など）、蝶園（黄浦区太倉路70号）に続く上海料理の有名店である。午後7時20分には屋外に出たが、待ち合わせの都合によりバスが出発したのは35分であった。宿舎には8時30分に到着した。なおバートルは13日午前帰国するため、水盛が最終的な引き継ぎを受けた。

4日目：9月13日（水） 講義聴講 前日に引き続き朝食は各自でとり、午前9時に集合した。出発は9時10分となった。校舎入口での出迎えは馬理明氏と張恵氏で、午前中は一昨日に続き張恵氏による中国語の講義を受けた。その内容は上海の交通事情や物価事情、さらには結婚時の不動産購買に及んだ。11時15分には学生食堂二階特別室へ向かう。昼食からは7月に多摩大学を訪問した学生5名が合流した。なお昼食の内容は学生食堂一階の惣菜を箱弁当として詰めたものであった。昼食の際には明日の馬理明氏へ学内企業見学を打診した。

午後1時30分より「龍熙服飾」の創業者で清華大学美術学院の出身である外部講師の趙永会氏による中国美術の講義を受けた。前半は中国の伝統絵画の技法について、また齊白石以降の画題の変化についてご教示いただいた。また後半は墨汁と「馬利牌中国画顔料」12色を使い中国絵画制作を実践した。午後3時45分に作品とともに集合写真を撮影した。



その後、7月訪問の中国人学生と交流をするグループ、宿舎に帰り英気を養うグループに分かれ、交流グループに日本人学生の中国語話者を配し、水盛は帰還グループを引率し宿舎へ誘導した。なお水盛は午後5時5分より一部の学生を引率し上海市中心部へ向かった。まずは宿舎最寄りの剣川路駅へと向かい、軽軌鉄道五号線に乗車、終点の莘荘駅から地下鉄一号線へ乗り換え徐家匯駅を目指した。剣川路駅まではタクシーを利用したが、宿舎より25分をかけている。運転手によれば、ちょうど帰宅ラッシュ時間帯ゆえという。なおタクシー会社は関行タクシーであったが、運転手は携帯電話をダッシュボードに配し「滴滴出行」（中国におけるUBER様の配車アプリ）を起動していた。

徐家匯付近は以前から電腦街として知られていたが、昨今はインターネット販売の隆盛により多くの店が撤退・業態変更しているという。じっさいに訪れた複合施設「百腦匯 BUY NOW」は往時の雑然とした気配は影をひそめスタイリッシュな雰囲気に変えていた。ただ近隣の「太平洋数碼一期 Pacific Digital Plaza I」は以前と同様の業態で、百腦匯とあわせ中

国の変化を見て取ることができた。なお徐家匯には「九拾秒 Metro Time」のような携帯電話でのみ購入可能な自動販売機があった（日本でも Suica 電子マネー専用 acure 自動販売機の導入が図られている）。陸家嘴の正大広場では「武蔵野 油 アブラ 油麵」（片仮名はママ）なる巨大短冊広告が吹き抜けに吊り下げられ、またこの港匯恒隆広場では「宇治茶舗 Uji Matcha 百年・京都・宇治・古法手作抹茶」なる店舗が進出しており、富裕層の日本ブランド志向はなお存在するように感じられた。

ついで地下鉄一号線に乗り人民広場駅へ向かい、そして八号線に乗り換え曲阜路駅を目指した。この駅には巨大モール「上海大悦城 Joy City」があり、三階には中国の携帯電話製造大手「小米科技」（xiaomi）の直販店「小米之家」が入居している。直販店参観の前に同モール八階のタイ料理店「漫步城中」で食事をし、その後に「小米之家」を参観した。ここでは携帯電話はもとより、テレビや炊飯器、果てはセグウェイ様の移動器具を販売しており、日本の同業のブランド戦略との差異を強く感じた。そして午後10時に同モールを離れ帰途についた。

5日目：9月14日（木） 講義聴講 前日に引き続き朝食は各自でとり、午前9時に集合した。出発は9時15分となった。今次は北708番商学院会議室に通され、9時50分より商学院講師の何東瑾氏が「無現金社会」と題して講義を行った。その内容は、まずは中国における電子決済の実態を、そして流行の軌跡を、さらに未来像について指摘するものであった。すでに電子決済の総額は一年あたり157兆元に達しているといい（2017年3月15日公布の中国人民銀行「2016年支付体系運行総体情況」によるものの模様）、中国の生活に根付いたものとなっている。その歴史はなお新しく、何東瑾氏の図示によれば、2009年に「移動支付」（携帯電話での決済一般）の実験が行われ、2012年には「支付宝」（アリババ系）によるQRコードでの決済業務が始まり、2013年には「微信支付」（テンセント系 WeChat の電子決済）も開始、2014年には両者がサービス拡大を図って「補貼大戰」（ポイント配布）を競い、やっと2015年にアップルペイが上陸してもサービスを思うように展開できないでいるという。そして遅ればせながら2017年には巨大銀行が銀聯に基づく「雲閃付」サービスを開始したが、苦戦が続くという。そして未来像として、政府は浙江省を皮切りにさらなるサービスの電子化（「往来港澳通行証」申請など）を進めており、完全なる無現金社会の実現を目指しているのであるという。なお学生からは違法アクセスへの懸念が質問されたが、何東瑾氏は政府の強力なバックアップを指摘し比較的楽観している旨を回答された。講義が終わったのは11時15分であった。

本日も学生食堂二階特別室にて箱弁当をいただく。なお馬理明氏は前日の願意に基づき学内企業の見学を交渉、12時15分より伝媒学院へ赴いた。水盛が3名を引率して向かったところ、ちょうど学内を探索していた一年生2名と伝媒学院四階で合流することができた。四階はほぼ全てが学内企業「盛視天橙 Great Orange」のために提供されている。盛視天橙は1986年生まれの陳嵩氏により2009年に設立された。陳嵩氏じしんは山東省淄博市に生まれ、上海師範大学謝晋影視藝術学院を卒業した。その後2014年には製作拠点を東海学院に移動し「盛視天橙伝媒東海映視製作中心」を設立、さらに同年には伝媒学院の兼職院長に就任したという。校舎四階には「VIP 洽談室」「撰映棚 Film Studio」「頭脳風暴 Brain Storming」「FILM 夢工廠 Film Dream Works」「VIP 達芬奇調色機房」といった多くの部屋がある。うち一室には昼食時にもかかわらず4名が勤務していた。うち1名に質問したところ東海学院の三年次学生であり、月給1500円でインターン研修を行っているとのことであった。なお調度類には「固定資産標簽」が貼られていた。馬理明氏によれば、これら調度類そして部屋といったハード面はす

べて東海学院側が用意したものであり、盛視天燈は頭脳や技術そして顧客といったソフト面を提供しているようである。見学を終えたのは12時45分であった。



北708番会議室に戻ると、午後1時30分には東海学院の学生も入室を開始する。ほどなく7月に多摩大学を訪問した唯一の高度日本語話者である冬梅氏が入室した。ただし冬梅氏は講義負担により午後2時には退出した。また楊静氏がおりにふれて来場した。そして馬理明氏が司会を行い、「中日文化交流会」を行った。冒頭には劉思杰氏と詹美佳氏がギターで「Wherever you are」を歌唱、ついで胡凌遠氏が上海市の歴史と現在について、そして張宇氏が上海の食文化と季節の伝統的食事について、そして程淑珊氏が春節など節目となる日の過ごし方について発表を行った。多摩大学側からは玉木・福里・鈴木組が日本と中国の主に箸文化の相違について、また遠藤・澤田・立野組が日本の温泉の利用マナーや有名度ランキングについて、そして奥秋・松永・加藤組が東京都市圏と上海都市圏の比較について、続いて黒河内・浅香・丑木組が日本の食文化について、最後に中島・一杉・住安組が日本の抹茶文化について発表を行った。全てのプログラムを終えたのは午後4時であった。その後、日中の友好を願って東海学院側より多摩大学側へ双方の固い結合をあらわす「中国結」が贈呈された。なお日中の学生は別れを惜しんで座談を行い、午後4時30分になってから学生食堂へ移動し小籠包を食すこととなった。最後に校門で日中学生が握手を行い、帰途についたのは午後5時30分であった。

宿舎到着は午後5時50分で、午後6時15分出発のところ35分になって最後の夕食および買い物に赴いた。目指すは羊肉の串焼きを提供する「大胡子超級焼烤」(永徳路生活時尚街225号)である。到着は午後6時50分、精算を終えて出立したのは午後8時50分であった。ついで巨大スーパー「華聯吉買盛」(永徳路419号)を目指し、最後の買い物を行った。午後9時40分に帰路につき、宿舎へ到着したのは午後10時10分であった。

6日目：9月15日(金) 上海浦東国際空港 → 東京羽田国際空港 水盛は学生への最後の配分を行うため午前7時30分に早朝の市街へ向かい、少額の買い物を行って高額紙幣を分割した。バスの到着はほぼ予定どおりの午前8時57分であった。ちょうど台風18号が上海付近に接近しており、中国では早期警戒報道が行われていた。そこで万一の遅延欠航に備え早い空港到着を目指した。空港到着は10時5分、荷物預け入れが10時35分、パスポートコントロール通過が11時20分、セキュリティチェック通過が11時35分であった。そして午後1時45分には離陸、日本時間午後5時ちょうどに羽田に着陸したのであった。なお荷物引き取りなどを終え外に出たのは午後5時55分であった。その後学生がWIFI返還を手伝い、京浜急行に乗り羽田を離れたのは午後6時40分であった。

4. 研修の成果と課題

最後に今次研修の成果と課題を述べたいと思う。なにより今次は多くの収穫があった。第一に、多くの参加学生にとって初めての中国であったため、異文化に触れる良い機会となった事である。たとえば現在もお飲料は「氷的」(冷たいもの)と頼まねば常温のものを給仕される。そこで中国では腹痛を恐れ低温の飲料が好まれない事を説くと、学生は納得した表情を見せた。ほかにも落とし紙の処理、水道水の飲用性、バイクのような見立ての電動自転車の存在など、学生の驚きは大きく、理解した時の感動も深かったようである。ほか学生が一様に述べたのは、大気状況が思いの外に清浄で治安状況も良好であった事である。実際の体験による先入観の修正となろう。また宿舎の関係で都市と郊外の差異を確認できたことも収穫であった。

第二に、海外の学生の姿を間近に確認できたことである。本校は復旦大学や上海交通大学といった合格困難校ではないが、実に多くの学生が熱心に勉学へ励んでいた。多摩大学の学生が東海学院の学生へ食事について質問したところ、学生は「外売」(テイクアウト)して宿舎へ持ち込むという。その理由は学習しつつ食事を採るためといい、日本側学生の驚きは深かった。

第三に、電子決済の実態を確認できたことである。或る学生は朝食に面包店(パン屋)での購買の際に、Alipay(中国の情報通信大手アリババの電子決済方式)ではなく現金での購買を望んだところ怪訝に思われたように感じたという。また学生食堂の自動販売機は現金と電子決済のどちらにも対応していたものの、現金投入口がゴムで封鎖されていて電子決済のみの受付となっていたという。都市と郊外で差異もあるが、周囲での電子決済利用率は顕著であった。

とはいえ、些少なからず課題もみられた。第一に、訪問学生が特に熱心な者とそうでない者とに分かれてしまったことである。一部は集合時間にもやや遅れがちであった。

第二に、良好な学習の再構成ができなかったことである。これは引率側の問題であるが、今次研修では夕食時に座談形式で情報交換を行うのみで、順序だった反省や展望を行うことがなかった。班活動をさらに活かし、夕食後に各々の見聞を発表し質問するといった学習方法を取り入れるべきであった。

第三に、東海学院側教員の多忙である。おもに司会いただいた馬理明氏によれば、若年の教員は土日を含む週七勤務であるという。そのため、東海学院唯一の高度日本語話者である冬梅氏も今次研修へ長期参加いただくことはできなかった。これは私立大学こそその問題であるかもしれない。また前述のように大規模外国人訪問は開学以来初めてであったといい、受け入れ体制も暗中模索であったようで、訪問時の講義計画や交流活動は頻繁に変更された。

そして第四に、学院そして宿舎が郊外に過ぎたことである。中国語案内のみとなる公共バスでの移動は中国語初学者にとって困難である。ただし2020年12月にはこの地域に上海地下鉄十五号線が乗り入れ、東海学院付近にも虹梅南路駅が建設されるという。地下鉄ならば自動券売機や自動改札を利用することで語学上の問題を回避することができる。

とはいえ、課題は解決可能なものであり、得られた成果は広く深い。帰国後一週間ほどして同行学生と接触する機会を得たが、みな一様に成長が見て取れた。今後も各地へ学生を引率すべく思いを新たにしたい次第である。